【体験版】

「ね、分かったでしょう。あんたが感じていなかっただけで、身体はしっかりと快感を溜めていたのよ。……それにしても、勃起すると凄い大きさね。さすがチームトップのエースってとこかしら」

「ぬ……がぁぁ……」

　まだ指先やネイルのタッチも使っていない、掌だけの扱きにも関わらず。

　彼は呻き声のボリュームがどんどん大きくなってゆく。

「どうかしら？　いいでしょ、あたしの掌。毎日スキンケアして、その辺の男子なら手コキで。初心な男子だと掌に包まれただけで瞬殺できるくらい気持ち良いだよ～～？」

「ぐ、ぐぁぁ……！」

「指の動きだって、スッゴくエロいフォームでしょ？目の前で"エアー手コキ"してただけで果てちゃった精通前の男の子もいたくらいなんだから」

「な、なんで……！？　俺がこの俺が、薄汚いビッチの掌ごときにぃ……」

「決まってるじゃない。アタシの方が格上だからよ－－この早漏ヤリチン」

「黙れ……嘘を……嘘をやめろぉぉ……！」

　こんなのは嘘だ。

　バトルファックの黒帯を持ち、とうとう　取り入って　プロのライセンスまで手に入るという俺が。

　貧乏な家庭の生まれのせいでトライアウトを受けられなかった俺が、やっと実力を証明できる機会を獲得したというのに。その実力を発揮できないま人生が終わるというのか。

「こんなはずない……はずは……ないんだぁぁ……！！」

　涙ぐましい忍耐。額に汗を浮かべて自らを鼓舞する努力を嘲笑うように、歯を食いしばっている龍閃の口元をクリクリと擽った。

「ふふ……おっかしぃ……！」

　可笑しさをこらえきれないネオが裏返り気味の声で。

「嘘だ……嘘をつくなぁぁあああ！」

　悔しさと快感に咽びそうになりながら、龍閃は歯噛みして堪えようとする。しかし、ネオの掌を通して、快感は敏感は部分から脳へと次々に注入されてゆくのだ。快感を逃すディフェンススキルを以てしても逃しきれない快感。

　シーズンインに万全の性欲で臨むためオナ禁を 2 週間続けていたために、通常以上に敏感に感じてしまう快楽が陰茎からドボドボと注ぎ込まれる。

　意識と理性の牙城を少しづつ少しづつボロボロと崩してゆく。

「はいは～～い、バカ面を真っ赤にして耐えてるとこ悪いんだけどさ、こんなのは 小 手 調 べ 。『ディフェンススキル』があるからとか言ってたのが気になっちゃうけど、ここらへんで一回射精させてアゲる」

　それは男にとって救いにも似た通告。

　一度射精すれば"賢者タイム"によって精神を落ち着けられるかもしれない。この逆境を脱するアイデアが沸く可能性だって……。

　しかしそんなうまい話はない事実を龍閃は薄っすらと察していたが、最早オーバーヒートを起こしつつある本能に今更ブレーキをかけられない。

　目の前でテラテラと輝く甘美な罠へ足を踏み入れてしまう。

「さぁ、おいで……」

「ぐ、くぅうう……！」

「アハハハハ！ チーム一番のエースである自分が、新米の使い捨てマンコに惨めに射精させられる――これ以上の恥辱ってある？ だけどこれはまだ善義みたいなお遊び。チームを抜けようとした者がどうなるのか――

　（耳元に唇を押し当ててハスキーボイスで）

これからじっくりと教えてあげる」

　余りの威圧感のせいで自分のペニスよりもブ厚く、そして大きく見えてしまうピンクの唇。自分自身が全身ブルドーザーに圧し潰されるかのようにペシャンコにされる錯覚すら覚えた。

「さぁ、とってもエロぉぉいナイトメアの世界に墜としてあげる」

「畜生……！」

　プロデビューも決まった。勝ち星を上げればファックマネーで大金を稼げる。そうすれば、このスラムでの荒んだ暮らしから足を洗える。

　これで自分の未来は明るい－－そう信じていた男子の金玉は、デビュー戦に備えて精子をスタンバイさせていた睾丸は、今や汚い路地裏で　女子の爪牙にガッチリと挟まれてロックオンされていた。

　もっとも、女より強い気になっていた"勘違い男"の遺伝子にはお似合いの最期だろうか。

「あ～～あ。なんだかアンタのセックス人生史上で最高の刺激を堪能してるみたいね。この調子じゃ暫く後になっても思い出して、ドピュドピョって夢精しちゃうかも。もしかしたら死ぬまでずっと、ずぅっと、ヨボヨボのお爺ちゃんになっても一人布団の上で夢精を続ける人生になっちゃうかもしれないわね」

　掌中心で扱いていた陰茎を、女は指の腹や指の股、ネイルも使って多彩な手形で優しく掴んだ。喘ぐ真も与えず、玉筋や竿の根元、カリ首まで次々とあらゆるタッチで犯し尽くす。

「お、おぉ、おぉおおお……！」

　絹のような滑らかな感触が陰茎を破裂寸前まで膨張させ、亀頭も赤く腫れあがっている。そして左右の指が陰嚢と男根全体を覆ったとき、悪魔的快感が男の脳内を非情にもショートさせた――。

「う、うがぁあああっっ！！」

　無情にも男の断末魔に誓い雄たけびがビルの渓谷に反響する。

「どう？　チ★ポで堪能するアタシのお手てのお味は？」

「この俺が、俺がああああっっ！　いいいいっっ！！」

「『俺がぁ～～』じゃなくて、ね？　どうなのかな　？」

　街を歩く女児達のフレッシュな子宮が雌としての本能に開花する程に精悍な顔立ちの男も、こうなれば形無し。

　声優のような澄んだ声色も、完全に崩壊している。

「――ぬほぉぉ、ぬほぉお、ぬふぉおんんん！！」

　もはや、風俗で初めてセックスを体験した童貞ですらこうはならないであろう、と言う程に無様なリアクション。

　顎を人体の骨格の限界まで仰け反らせながら、全身から脂汗をプシャァと噴出して体をベトベトに手からせている。鍛えられた肉体がオイルでコーティングされ、男性的な魅力に溢れた身体が安物の玩具よろしく粗雑に弄ばれてしまう。

「違う違う違う、『味はどう』って聞いてるの。わかる？聞こえてる？」

「ぐ、ぐぎ……おっほぉぉおお……！」

「それは何？返事もできないくらい気持ちいいってこと？気持ちいいってことなの？そうなの？そうなのよね？そうなんでしょ？そうだってことぐらい言って見なさいよホラホラホラぁ！」

「おっほぉぉおお！！！！！！！！！！！！！」

　→→本編へ